

十三、静かな退陣

池田さんが喉頭ガンと診断されたのは、昭和三十九年九月六日のことであり、主治医であった比企博士、東大の切替教授等の勧めに応じて、築地のがんセンターに入院されたのは九月九日のことであった。国立がんセンターを選んだのは、その放射装置とそれを操縦される技術陣の能力と経験が秀でていたためである。当の池田さんには咽喉の軟骨が、このままでは腐蝕のおそれがあるので、放射線治療の必要があるためだといって諒解を得た。

これはえらいことになったというのが、私ども側近の偏らない感懐であった。そしてその瞬間、われわれはお互いに言葉には出さなかったけれども、政権の閉幕という大きい課題を意識していたのである。池田さんの心中は窺知するよしもなかったけれども、表面は極めて平静で、快く入院にも応じてくれたし、何のことはない過労と咽喉の使い過ぎだくらいに考えられているように見えた。それというのも、その直前池田さんは熊本市における一日内閣を終えられて郷里に

帰り、珍しく選挙区を限なく回られ、至るところで演説をされた。それだけではなく、広島市では空前の大聴衆を集めて、一時間余に及ぶ長い演説をされたこともあったからである。

放射線治療は順調に進み、患部はメキメキよくなっていった。入院中、政府との連絡は鈴木善幸君（官房長官）、党との連絡は私（副幹事長）、病状の発表は相良博士（がんセンター運営部長）というふうになり、それぞれ一本化することとした。それはできるだけ訪客を遠慮していただいて、療養に専念していただくとともに、病状に対する各種の臆測が当の池田さんと世間に反射することを避けるためであった。

池田さんは毎日毎日をもてあましておられるようであった。各方面から贈られた花に囲まれて、絵を取替えてみたり、東西の傑作を蒐録した美術全集を繙いてみたり、テレビの番組に気を配ったりしておられた。

事態は一見平静に推移するようには見えなかった。幸いに政局を揺がすような大きい問題もなかった。しかし現職の総理が入院加療中であるという厳たる事実は、隠れもない現実であった。総理が現に担われておる内外にわたる重い責任は、逃れることはできなかった。従って、世間の同情と寛容にもおのずから限度があるはずである。われわれ側近の焦慮は、環境の平静に反比例して日増しに増嵩してゆくのみであった。大きい決断が要請されていたのだ。

前尾（繁三郎）さんと伊藤昌哉君（秘書官）と私は、比企総長と久留院長の要請に応じて、密かにお目にかかり、あるがままの病状とその展望を伺った。われわれの方から面接を求めたことも再三ならずあった。われわれの関心は、池田さんの病気が治るか治らないかという問題に加えて、総理という責任に應えるに足る活動が、いつ頃から持続的に可能であるかどうかという微妙なタイミングの問題であった。同時に現実に進行中の病状をいついかなる方法で、いかなる内容のものを世間に発表するかという問題であった。

ガン・センターを中心とする治療陣の判断は、当然、病状自体を見つめての極めて良心的かつ慎重なものであった。それは必ずしも政局の処理にヒタリとくるものではなかった。しかし、十一月には否応なしに、米価改訂と災害に伴う補正予算を審議する臨時国会を召集しなければならぬ。その場合は、一応、首相臨時代理で勘弁してもらふことはできないことではあるまいが、それからの予算編成、次いで通常国会となると、総理自身が登院して施政方針演説だけでなく、国会答弁の矢面に立つことが絶対的に必要になってくる。そこでわれわれの判断の基礎は、一月下旬以降、健康な状態で国会審議に持続的に当り得るかどうかということがギリギリの限界であったのである。

九月二十四日の病院側の発表は、その判定がつかないままの状態であったので、後三週間くら

い治療を試みたうえで、改めて発表するという歯切れの悪いものにならざるを得なかった。しかしわれわれは、放射線による治療が順調にいつて、仮りに池田さんが全治されるとしても、一月下旬以降、総理としての完全な活動を再開するまでには到底至るまい、という危懼から解放される日はなかったのである。

十月十日からは、東京オリンピックという世紀の祭典がもたれるといっているので、世間はオリンピックに対する期待と準備に忙殺されていた。マスコミの表情も、どうやらオリンピック一色に塗り潰され、池田さんの病状と政局問題はその陰にかくされてしまったような状況であった。私どもは、このオリンピックが開催されておる間に、池田政権の行方について確たるメドをつけ、できることならばその処理の方法や手順もかためておきたかったのである。

十月中旬、私どもと、診療側との打合せの焦点は、先に述べたように、いつ頃から池田さんが健康をとりもどし、総理としての緊張した勤務に持続的に耐えられるかということであった。診療陣は、仮りに放射線治療によってガン菌自体が死滅しても、患者はなお長期療養の必要があり、そのためには事情さえ許せば、当面の大きい責任を解除して差上げることが賢明な措置であるという意向にかたまってきた。

私どもの決意はいよいよ決定的となった。十月十六日からはじめて二十日頃までには、池田さ

ん御自身に退陣を決意してもらわなければならないことになった。池田政権発足の時、朝に組閣して夕べに倒れてもかまわない、長期政権の野望は禁物であると誓ってくれた池田さんであった。然るにこの四年三カ月、党内外の支持を得て、大過なく今日に至るを得たことは望外の倖せであり、それ自体有難いことであることをよく理解しておられた池田さんであった。さらに政権の座につきよりは、それから去ることの方がより難しいものであるが、往々にしてそのチャンスは掴み難いものであることも、折に触れ、われわれは話し合っておったことである。然るに天は池田さんに幸いにして「病氣」というチャンスを恵まれ、政権の座を去る契機をもたらすとも、一個の庶民としての自由な境涯の門戸を開いてくれたのである。このことに気付かない池田さんではなかつたはずだ。

私どもと池田さんとの間に、退陣を巡つてのむつかしいやりとりは幸いにみられなかつた。病院側が留保しておる病状発表の期限はすでに到来していた。私どもはその契機を捉え、その発表の日をまず決め、次いで同時に発表すべき政府側の声明案を用意して、池田さんの裁断を求めたのである。池田さんはそれに何のこだわりもなく素直に応諾されたのである。その瞬間から池田さんの表情は明るくなり、拳措も軽やかになられ、食欲も進まれたよつであつた。

私どもは当初、十月二十四日の夕刻を発表の時期として予定していた。オリンピックの聖火が

静かに消えて、螢の光が高らかに合唱されるであろう瞬間における劇的な退陣を想っておった。しかしそれは、あまりにも構えすぎたことになりはしないかという反省も手伝って、発表の時期を翌二十五日の午前十一時としたのである。

当日午後二時、池田さんは政府側から河野国務相、鈴木官房長官、党側から川島副総裁と三木幹事長、それに私を同時に病院に招き、入院以来今日まで迷惑をかけたにもかかわらず、心のもった協力をいただいたことに謝意を表し、政治の空白と動揺をさけるため、自分は退陣の決意をしたことを静かに告げられた。そして川島、三木両氏を中心とする執行部の手によって、一日も速かにかつ話し合いによって、円満に後継首班を銜衡されるよう求めた。同時に政府側もこの執行部の仕事に十分協力されるよう要請され、一同も快くこれを諒承した。

それから二週間、池田さんの要請に応えて話し合いによる後継首班の工作が続いた。もちろん主役は川島正次郎、三木武夫の両氏であった。私の仕事は、池田さんと川島、三木両氏との間の連絡、接着のことであった。私の第一の関心事は、この工作があくまで川島、三木氏を軸とする執行部の手によって、しかもその手によってのみ行なわれることを保証することであった。そうすることが党の統一を護り、政治に対する信頼に應える道であることはもとよりであるが、もしそのことに失敗すれば、がんセンターに在る病首相みずからが工作の矢面に立たなければなら

なくなり、それは彼の生命までも奪うであろうことをおそれたからである。第二に、従つて池田派をはじめ各派の動きが、執行部を軸とする工作の筋道から少しでも外れることのないよう十分警戒することであつた。もしこの工作に失敗すれば、日本はその民主政治の信用を内外に失うばかりでなく、池田政権はいついつまでもその汚名を歴史に残さなければならず、これまでの四年有余にわたつてなすとげた一切のことが、瞬時にして消し飛んでしまうことになるからである。閉会式は開会式よりも重要であるからである。

十月二十五日より十一月九日に至るまでの二週間は、熱い湯桶にはいつているように、永い緊張した歴史的時間であつた。党内にはもちろん若干の漣は立つた。世間にはもろもろの思惑や臆測が流れたようであつた。しかし、それらは幸いにがんセンターの病窓まで押し寄せるには、至らず、また私どもの敷設した軌道をくつがえすには至らなかつた。

正直にいつて、佐藤栄作氏は党内多数の支持勢力に恵まれ、財界と政界玄人筋の強い支持があつた。一方、河野一郎氏は、その卓越した実行力と鋭い政治感覚によつて、庶民の間に抜き難い期待と支持をかち得ていた。片や吉田茂氏を源流とする官僚派であり、片や鳩山一郎氏を源にもつ党人派であり、この両勢力は正に日本を二分した形勢であつた。川島、三木両氏を軸とする執行部の苦心も並たいていではなかつたし、当の池田首相の苦悶も想像を絶するものであつたらう。

しかし時間は否応なく経過し、秒読みの緊張が続いた。そして終に党内外の情勢の煮詰まるところ、池田首相の裁断という形で、後継首班は佐藤栄作氏に決つたのである。

首班指名選挙は、十一月九日の午後二時から衆議院を皮切りに行なわれた。当日の自民党の投票は二八三票という空前の投票であつた。一票の棄権もなく、それは整然と行なわれた。河野一郎国務大臣は、私に近い議席で、終始にこやかに綾部健太郎運輸大臣等と共に、若干のかいぎやくをさえ交えられつつ、投票を終えられた。私はそれを立派だと思つた。その日のハイライトはたしかに河野一郎氏であると思つた。これで日本の民主政治は救われたと思つたのである。かくて佐藤政権は誕生し、私どもは池田政権の閉会式を事無く終えることができたのである。

本会議終了後、私はその顛末を、すでに前首相になられた池田さんに報告した。池田さんはテレビによつて、終始その状況を見ていたようだった。私は「十一月九日という日は、貴方にとつても私にとつても生涯における最良の日ですね」と申上げた。池田さんは黙してうなずかれた。池田さんという人は、不治の難病に冒されて予想より早く他界された気の毒な人であつた。しかし政治的には最も恵まれた倅せな方であつたのではなからうか。